

セラヤの決戦

北部、北東部および西部のカランサ軍を圧迫するビヤの戦略は一時的には成功した。パブロ・ゴンザレスの軍は戦意がなく、ビヤとの衝突を避けていた。北東部でただ一箇所カランサ派が死守したのは石油地帯、タンピコ周辺であった。カランサ軍指揮官ハシント・トゥレビニョはビヤ軍ウルピナの攻撃を退けたばかりか、ウルピナ軍を壊滅寸前にまで追い込んだ。もしこの地区をビヤに渡したら、ビヤとカランサの地位が逆転する事をカランサもオブレゴンも十分に理解していた。石油の輸出は莫大な収入をもたらしていた。次の作戦に関して、カランサとオブレゴンの意見は分かれた。カランサはオブレゴンに北部との補給線を切断した後メキシコ市から南に撤退し、ビヤの攻撃を待つよう指示した。オブレゴンは反対した。彼は攻撃に転ずるのがベストであると言った。攻撃こそ石油積み出し港タンピコを、ビヤの攻撃から守る唯一の方法であると主張した。

オブレゴンはビヤの戦術を具に研究した。ビヤの弱点を見出すのは難しくなかった。ビヤは主として大規模な騎兵攻撃に頼っていたが、それらはお互いに連携した組織的攻撃ではなかった。ビヤは予備軍を確保する必要性を理解していなかった。オブレゴンはヨーロッパでの戦闘で採用されている戦略・戦術を研究していた。第一次世界大戦の初めの頃、双方とも騎兵攻撃を主力とした。しかし次第に騎兵攻撃は時代遅れと気づき、戦闘は歩兵を中心に展開するようになっていた。塹壕と鉄条網の影に潜んだ歩兵が機関銃で騎兵をなぎ倒していた。⁴⁹

オブレゴンはヨーロッパの戦術をビヤに対して適用する事を考えた。彼はビヤ軍が集中している地域に近いイラブアトに軍を進めた。オブレゴンはバヒオと呼ばれるメキシコ中央部にある広大な穀倉地帯の一角、セラヤを戦場として選んだ。縦横に掘られた灌漑用の溝は騎兵攻撃を邪魔し、掘割を使用すれば彼の軍は塹壕を掘るまでもなかった。オブレゴンはビヤの騎兵隊が大挙して攻めてくる事を望んだ。危険はあった。前線部隊に供給する武器弾薬は敵地を通過する鉄道で運ばなければならなかった。もしサパタ軍がこの補給路を集中攻撃すれば、ベラクルースの基地から孤立し、弾薬の不足に陥る事になった。アンヘレスがビヤを説得して持久戦に持ち込むことも考えられた。それでもオブレゴンには自信があった。ビヤとサパタの間の溝は深まっていて、サパタが大規模な攻撃を仕掛ける可能性はゼロに近いことをオブレゴンは首都のスパイからの報告で知っていたし、ビヤの性格から、彼が退却して守備に回る事は考えられなかった。⁵⁰

ビヤは自分でオブレゴンと戦うことを決めていた。その理由は彼の弾薬が不足したため、オブレゴンから分捕るつもりであった。ビヤはオブレゴンのことを、香水を振り掛けた優男ぐらいに考えていた。オブレゴンの作戦能力を知っていたアンヘレスはビヤが攻める事を諫めた。オブレゴンの弱点はベラクルースからの補給路を断たれることで、アンヘレスはオブレゴンを更に北へ誘き寄せる事を進言した。ビヤはアンヘレスの助言を聞き入れな

かった。ビヤは連戦に連勝を重ねていたし、周りにちやほやされる事で自分を過信していた。さらに、戦わずして後ろを見せると、多くの部下が自分を見限り、敵に寝返ることを心配した。アンヘレスが攻撃を控えるよう進言したのは他にも理由があった。彼は落馬して負傷し、ビヤに同行できなかつた。彼は向こう見ずで、軍事教育のない傲慢なビヤが負ける事を恐れていた。心配していた通りになった。ビヤは自軍が有利に展開できるよう、自ら戦場を選ぶ事をしなかつた。そればかりか彼はオブレゴンとの決戦の場となったセラヤの偵察を怠った。十分な弾薬を持たぬまま攻撃した。それよりも重要なのは、オブレゴン軍の脆い補給路を襲い、ベラクルースからの補給や援軍を断つこともしなかつた。ビヤがオブレゴンを見送っていた事が最大の敗因であった。51

1915年4月6日、開戦初期の段階でオブレゴンは戦術を誤った。イラブアトとセラヤの間で、ビヤの進軍を止めるため鉄道線路を切断しようと、オブレゴンは充分に偵察をしないで千五百人の部隊をエル・グアヘに送り込んだ。ビヤ軍はイラブアトに集中していると彼は考えていたが、実はエル・グアヘにいた。この部隊は圧倒的多数のビヤ軍の攻撃に逢い壊滅寸前になった。オブレゴンは自ら指揮する軍用列車でエル・グアヘに向かい、ビヤ軍の攻撃を自分の前衛部隊に向けさせようとした。機転のきくオブレゴンはこの時、ビヤ軍を自分が細心の注意を払って築いたセラヤの守備陣のほうへ誘導できると気付いた。オブレゴンは、無謀なビヤが自然の障害物を無視して、得意の騎兵攻撃を仕掛けてくることを願った。

間もなくオブレゴンの予想は的中した。オブレゴンの前衛部隊と列車が後退すると、ビヤ軍は勝利を握ったと思い込んだ。ビヤ軍はオブレゴンが防御を固めた場所に向かって突っ込み、塹壕の兵士から機関銃の掃射を受けた。損害は大きかった。頑固なビヤは諦めなかつた。彼は勝利を信じて熱狂し、連戦練磨の部下は彼に従った。それまでの戦闘では最初失敗しても、二回目の攻撃で必ず勝利していた。何度も何度も突撃を繰り返した。一度オブレゴン軍の戦列が突破された時、オブレゴンは喇叭兵の少年に退却の合図をさせた。ビヤ軍はこれを自分たちの司令部からの合図と受け取って、折角圧倒しかけていたところで引き上げてしまった。ビヤ軍は血まみれになり、疲労困ぱいし戦意を失っていた。この瞬間オブレゴンは決定的な反撃に出た。このときビヤ軍の弾は尽き果てようとしていた。ビヤ軍は二種類のライフル、30-30とモーゼル銃を使用していた。30-30の弾丸はあった、しかしモーゼル銃の弾を使い果たしていた。ここでオブレゴンは予備軍を投入し、疲れ切った兵は後方に退いた。カランサはふんだんに弾薬と物資を前線へ送っていた。ビヤはこの補給線の攻撃をサパタに任せていた。ビヤが供給する約束であった弾薬はサパタのもとには届かず、サパタ軍はモレロスから動こうとしなかつた。52

ビヤはセラヤの戦いで最初の大敗を喫した。ビヤも指揮官たちも一様に弾薬の不足を敗戦の要因に掲げた。しかし、会議派のロケ・ゴンザレス・ガルサが派遣した視察団は、そ

のほかの要因を指摘した。それらはピヤが予備軍を作らなかったこと、そしてピヤ軍に離反者がいたことであった。戦いが最高潮に達したとき、コリンというピヤ軍指揮官の部隊が、急に向きを変え、味方に攻撃を加えた。

戦闘後お互いが相手の主張する勝利を否定し合った。カランサとオブレゴンの勝利はメキシコの内外で疑問視されていた。ピヤは負けたが、完敗ではなかった。彼は大部分の軍勢と武器は確保し、部隊の士気は高かった。オブレゴンの全般的な状況は不安定であった。オブレゴンの弾薬は底をつき、ベラクルースからの列車による補給が頼りであった。もしピヤが東岸や西岸で戦っている彼の部隊を、守備兵だけ残して集結させていれば、もしピヤが武器弾薬の到着まで待っていたら、もしピヤがオブレゴンの補給線を襲っていたら、彼はオブレゴン軍を壊滅させる事が出来た。しかし彼はそれらを何一つしなかった。53

ピヤはカランサ軍の指揮官に手紙で、セラヤの人々に危害を加えないよう、戦場を別の場所に移すことを申し入れた。オブレゴンは動かなかった。4月13日、ピヤは同じ戦術に固執した。オブレゴンは前回に増して準備を整え、ピヤの攻撃に備えていた。兵士が構えている塹壕の前に鉄条網を張り巡らし、機関銃も増やしていた。彼は六千の騎兵を予備軍として近くの森の中に待機させていた。塹壕で固めたオブレゴン軍に向けてピヤ軍は突撃を繰り返した。ピヤ軍は無数の溝に阻まれ、鉄条網を切らなくてはならなかった。それを乗り越えたところで機関銃の掃射により薙ぎ倒された。

ピヤは同じ過ちを繰り返し、相手の補給路を襲おうとせず、斥候を放つ事をせず、セサレオ・カストロが率いる六千の騎兵が潜んでいる事に気が付かなかった。またも予備部隊を残さず、全部隊を一気に投入した。オブレゴン側も危ない状況であった。残りの弾薬は二三時間分しか残っていなかった。ピヤ軍が二日にわたる攻撃で疲労困憊しているところをオブレゴンの騎兵が襲った。今度は完敗であった。最後の攻撃を試みた一大隊は捕虜になった。戦いの後オブレゴンは捕虜になったピヤ軍将校に危害を加えない事を約束し、名乗り出るように言った。殆どの将校は兵士の制服を着ていた。ピヤ軍の将校百二十名が名乗り出ると、オブレゴンは全員をその場で射殺した。オブレゴンの大勝であった。ピヤは砲三十二門を失い、戦死者三千人、捕虜六千人、オブレゴンはライフル五千丁、馬千頭を確保した。54

ピヤが何故間違いを二度繰り返したか、その理由は定かではない。アンヘレスが不在であったことが大きく影響した事は確かである。もう一つはピヤの独断的な男らしさ、マチズモであった。退却を恥辱とし、オブレゴンに正面きって戦わないと彼の不敗神話が崩壊すると考えた。彼は最初の敗退は弾薬不足であると宣伝したことに囚われすぎた。彼の機関紙も、今度は敗戦を認めざるを得なかった。それでもピヤは自信と勇氣に溢れ、いかなる苦難をも乗り越えることが出来る忍耐の持ち主であった。ピヤは敗戦を認めず、兵士たちは戦い続けることを誓った。彼は他の地域からも部隊を集め、アンヘレスも怪我から回復

して加わった。

アンヘレスはオブレゴンに勝利する事は可能である、そのためには作戦を根本から変える必要があると言った。北部師団はトレオン或いはチワワまでも撤退することにより、セラヤでの敗戦から盛り返す時間を稼ぐ事が出来るのと同時に、オブレゴンの補給線を延ばすことが出来る。更にピヤ軍は防御に専念し、持久戦に持ち込み、相手の弾薬を消耗させる。ピヤはこの進言を拒否した。彼は自分の故郷に帰る事はせず、メキシコ中央部、グアナファト州レオン近郊で立ち向かうと言った。ピヤは一寸だけアンヘレスの意見を取り入れ、レオンとトゥリニダの間約二十キロにわたり塹壕を掘り守勢に回ることにした。全軍を集中させたカランサ派と、会議派の先鋭部隊が対峙した。55

ピヤが守勢に回ったことでレオンの戦闘は四十日間にわたり、ヨーロッパ戦線のように膠着状態が続くかに思われた。双方は限られた兵力で衝突し、有利な状況を作ろうと、全面攻撃を避けた。オブレゴンはピヤがセラヤでやったような騎兵による総攻撃を仕掛け、機関銃で薙ぎ倒しにする機会を待っていた。ピヤは敵を喜ばせるような事はしなかった。オブレゴンの指揮官たちは、ピヤが自分たちの弾薬を消費させ、補給路を断つことを心配し始めた。事実サパタがやっとカランサの補給路を断つため、かなり大きな分遣隊を派遣していた。ピヤ軍がセラヤで敗れたため、カランサ軍がモレロス平定作戦に出ることを恐れたためであった。しかしサパタ軍は武器をもたず、自分の州外で攻勢に出ることを好まなかった。ピヤはなぜかベラクルースからの補給路を遮断することに本腰を入れなかった。

オブレゴンのジェネラルの中で、特にフランシスコ・ムヒカは戦闘の経過に危惧を抱いていた。膠着状態である事はどちらも相手を倒すほどの強さを持っていないことの証拠であった。彼はこのままの状態が続けば、ピヤに有利になることを心配した。敵が補給線の切断をすれば、十分な弾薬を手に入れることになり、我々はベラクルースとの連絡を絶たれ孤立する、とムルギアはオブレゴンに攻撃に転ずるよう求めた。彼はディエグスはじめ多くのジェネラルの支持を得ていた。オブレゴンはその戦術には消極的であった。彼はピヤに対して成功したセラヤと同じ戦いになることを期待していた。オブレゴンはピヤの衝動的な性格を熟知していて、持久戦が長引けば気短な彼は必ず攻撃を仕掛けてくると考えていた。しかしジェネラルたちの圧力に押され、6月5日、オブレゴンは終に攻撃を決意した。その三日前、オブレゴンの期待通りピヤは待ちあぐねて総攻撃を仕掛けた。ピヤが痺れを切らしただけではなく、兵たちは慣れない塹壕戦の困難な状況が長く続きうんざりしていた。56

アンヘレスの忠告を無視して、ピヤは予備軍も連れてカランサ軍の背後から攻撃した。初めは成功し、シラオの町を占領した。しかしもう一つの分遣隊は狙ったサンタ・アナ・アシエンダを陥れることが出来なかった。サンタ・アナはオブレゴンが反撃を行う際に最も重要な拠点であった。この攻撃で多数の犠牲者が出、北部師団は戦意を喪失した。6月

3日、オブレゴンはアシエンダの塔に登り戦況を偵察していた時、ビヤの砲弾が炸裂しオブレゴンの右腕を打ち砕いた。オブレゴンは出血多量で死を予想し、自殺しようとピストルでこめかみを撃った。彼が幸運であったのは、彼の補佐官が前の晩にピストルを磨き、弾を抜き取っていた。彼はピストルを取り上げられ、病院に担ぎ込まれた。オブレゴンは動けなくなっても彼の軍は麻痺しなかった。ビヤが予備軍を前線から引き上げると、ビヤ軍は脆さを露呈した。この瞬間をカランサ軍は待っていた。ベンハミン・イルの部隊が攻勢に出て、ビヤの防御線はイルの部隊を押し返すことが出来なかった。6月5日、ビヤ軍は三千人以上が倒れ、混乱のうちにレオンから撤退した。57

鳥取県出身船越広蔵はこの戦闘に参加した。「パイオニア列伝」の村井謙一に、彼は次のように語った。「第一満州丸で十八歳のみぎりオハケニヤに入植。わずか十日間耕地にいたが、働いたのは半日のみであった。とにかくマラリヤ病で毎日どんどん日本人が死亡するので、十円ずつ集めて監督に届け、解雇の許可を堂々と取った。革命戦には華々しく若気の至りで参加し、とくにオブレゴン將軍の第一ソノーラ旅団長ランカーガ中將の運転手をして、革命戦の関ヶ原というセラヤ攻略をすませ、いよいよツリニエダに差しかかったさい、軍用列車の機関車に重油がないので割木を山と積んだところへ発火、先方には鬼とでも戦うヤッキー族軍がそれとばかりにわが軍を打たんとするので、味方の軍勢は恐れをなして続々と退却せんとする。よって当時の船越少尉は猛火の機関車にかけ上がり、『者ども返せよ、返せよ』と号令したためようやく意気を取りもどした味方軍の総退却をくいどめることがなかった。この勇敢にして果敢なる東洋人を旅団長は激賞して、ただちに位一級をあげて中尉の特進を受ける光栄に浴する。天下分け目のツリニエダ大激戦でさすが勇名をはせ、強大であったビヤ將軍の大敗となり……」58

レオンの敗戦でビヤは覇権争いから脱落した。それでもビヤは諦めなかった。彼はまだオブレゴンを負かすことが出来ると信じて、最後の戦いの場をアグアスカリエンテスに定め、全ての部隊を集結する一方、ベラクルースからの補給路攪乱を最優先にした。彼はロドルフォ・フィエロとカヌト・レイエスの其々が率いる二つの騎兵部隊をオブレゴン軍の背後に送り込み、鉄道輸送を分断した。オブレゴンはアグアスカリエンテス攻撃隊の一部を補給路確保に回した。フィエロはカランサ軍のレオン守備隊長宛に、市から撤退を指示した偽造電報を送り、一時的にレオンを占領した。次いでサパタ軍と協力してパチュカを落とした。これに驚いたパブロ・ゴンザレスはメキシコ市から彼の軍を撤退させた。数週間後、フィエロはオブレゴンの部隊によって撃退された。敗れる前にベラクルースとオブレゴン前線との間の補給路を切断することに成功した。これがセラヤ戦の数週間前に行われていたら、結果は違っていただろうか。今となっては遅すぎた。手持ちの弾薬が残り三日分しかないことを知ったオブレゴンはアグアスカリエンテスのビヤ軍に総攻撃をかけた。三つの戦いで敗れた北部師団は既に戦意をなくし、抵抗することなくトレオンとチワワを

目指して北へ逃げた。北部師団は一地方勢力に転落した。59

ビヤの敗戦は総体的な戦略の過ちに起因した。彼の絶頂期、アンヘレスはカランサ派が未だ自らの軍隊を掌握していないうちに、ベラクルースを攻撃すべきだと進言したのを聞き入れなかった事は、ビヤが犯した最大の過ちであった。二つ目の間違いは、総力を結集してカランサ軍を一つ一つ潰さず、同時にあちこちで攻撃を仕掛けたことである。第三の間違いは、彼がアンヘレスの進言を退けて、補給を困難にするためカランサ軍を、更に北へ北へと誘き出すことをしなかったことである。

戦術的にも過ちを犯した。セラヤでは敵に最も好都合な場所を選んでオブレゴンに攻撃を加えた。彼は戦場を偵察することを怠った。彼は全面に亘って同時に攻撃を仕掛けたため、敵の一角を圧倒することが出来なかった。塹壕に身を潜め、鉄条網で防御し、機関銃を掃射するオブレゴン歩兵部隊の正面に攻撃を仕掛け、多くの死傷者を出しながら、その後の戦いでも戦法を改めようとしなかった。セラヤでの初戦ではサパタ軍に補給線の攪乱を期待していたのは理解できる、しかし一度サパタに期待が持てないことを知ってから、自らベラクルースからの連絡線を断とうとしなかったのは理解できない。最後のアグアスカリエンテス戦になって始めて実行したが、既に遅かった。ビヤは予備軍を確保しないという間違いを何度も何度も繰り返す過ちを犯した。数時間に及ぶ戦闘に疲れ切ったビヤ軍はオブレゴンの新たに投入された予備軍に抗する術がなかった。60

ビヤはメキシコ北部の人間としての物の見方しか出来なかったため、ベラクルース攻略を避けたと思われる。もう一つはビヤの無教育の結果でもあった。教育のあるオブレゴンと異なり、ビヤは新聞を読まず、ヨーロッパの第一次大戦で展開していた新しい戦術については何も知らなかった。以前は他人の、特にアンヘレスからの忠告に耳を傾けることで自分の無教育を補ってきた。しかし絶対的な支持を得て会議派軍の最高指揮官に選ばれてからは傲慢になり、誰の意見も聞かなくなった。ビヤはオブレゴンやカランサのように部下の意見を取り上げる事はせず、自己批判ということをしなかった。彼が犯した戦略・戦術的過ちを悟ったという証拠は何処にも見られなかった。壊滅的な敗戦の後、ビヤは自分の領域に戻りひたすら自らの保身に専念した。61

49. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P488
50. Ibid. P488
51. Ibid. P489
52. Ibid. P491
53. Ibid. P492
54. Ibid. P493
55. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P494
56. Ibid. P495
57. Ibid. P496
58. 村井謙一「パイオニア列伝」1976、P28
59. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P496
60. Ibid. P497
61. Ibid. P498